芭蕉「梅花」考

胡　文海

一、始めに

花鳥風月の所謂風雅を楽しむ詩人たちは、常に自然風物の醍醐味を正確に捉える力、つまり物に対する感覚の鋭さを身に付けている。この感覚には、視覚的なもの、聴覚的なもの、身体的なもの、それに嗅覚的なものなどが含まれている。これらの能力を巧みに運用することによって、詩人たちは森羅万象の世界を言葉で具出することができた。

こうした中に、嗅覚を怡悦させるものとして、千々の花の「香」が愛好され、しばしば詠まれている。しかし、この「香」は単なる嗅覚の満足にとどまらず、「香」に対する関心の深まりと相俟って、「香」の含意も膨らみつつある。短小な詩形を持つ俳諧において花の香が至極巧みに表現され、時には一句の余情もこれら人間の心を奪う香気に寄せて表出している。本論では、芭蕉発句で薫香を放つ「梅花」をめぐって、更に言えば芭蕉俳諧における梅の句を分析し、芭蕉における梅の捉え方、嗅覚の生かし方などについて検討する。

中国から日本に渡来した植物としての梅は、花に気品があって香りが高いため、庭木として古くから愛好されてきた。また「歳寒三友」の一つとしての梅は、中国人にも愛好されている。その上、風流を極める遊びとしての「九九寒梅図」、あるいは「学に親しめば梅開き、疎かにすると梅開かず」と語り伝えてきた晋の武帝の物語などから、梅は中国人にとって超俗的で、風雅に富む孤高の高士ともいえる存在であることは言うまでもない。また日本では、『万葉集』において花といえば「梅」というのは無論、梅園としては屈指の規模を誇る京都北野天満

宮、富岡鉄斎の絵にも登場する月ヶ瀬梅渓など、梅花の観光名所は随所に見られる。このように、日中の人々に愛しまれた梅は、文学作品に屡々姿を現す。しかし、両国の人々はどのように梅を楽しんできたか、ないし梅を称賛する見方は完全に一致しているのかについては疑問を抱かざるを得ない。

従って、本論では、日本文学、なかんずく季題である「梅花」を考察した上で、日中美的見地の相違に基づき、芭蕉俳諧における「梅」の裏にある感情、オリジナルな描き方を掘り下げ、その梅の句を再考しようと考える。

二、和歌における「梅花」

渡瀬淳子が「唐以前の詠梅詩は詩の中の〇・二三％（二六首）、唐詩では〇・一六％（九〇首）だったものが、宋代になると詩の一・八五％（四七〇〇首）となり、前時代に比べても爆発的増加となっている」[1]と述べているように、「梅」は漢詩において多く用いられ、しかも色、形、香など様々な面から梅が吟じられるようになった。例えば、

疏影横斜水清浅、暗香浮動月黄昏。　（「山園小梅」・林和靖）

梅は須らく雪に遜るべし三分の白、雪は却て梅に輸一段の香。　（「雪梅」・盧梅坡）

帰来適過ぐ梅花の下、春は枝頭に在て已に十分。　（「探春」・戴益）

などの詩句が挙げられる。盧梅坡は雪と梅を対比しながら、色と香という両面から梅を吟詠したのに対し、梅妻鶴子と呼ばれる林和靖は闇の中から漂ってきた梅の香を際立たせて朗詠した。そして、戴益は視覚の面から梅の咲く景色を讃美している。このように、漢詩では、梅を大事な風物として、いろいろな面から取り扱っている。ところで、古くから梅を愛でてきた日本文学、特に和歌では梅はどのように詠まれているのであろう。

『伊勢物語』第四段に「又の年のむ月に、むめの花ざかりに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、ゐて見れど、去年に似るべくもあらず」と咲き乱れる梅に「去年」を偲ぶ一文がある。また、『徒然草』十九段にも「なほ、梅の匂ひにぞ、いにしへの事も立かへり恋しう思ひいでられゝ」と、「梅の匂ひ」に「懐古」の思いを惹き起こしつつ心情を語り出している一文がある。このような類似は必ずしもたまさかではなく、梅、特に梅の香に往昔を慕わしく思う気持ちが誘い出されるのは多くの先行作品および研究から確認できる。しかし、いつから梅にこのような機能が賦与されるようになったのかが疑問に思われる。本章で

は、和歌における「梅」に内包されている意味を検討していく。

『万葉集』には梅を詠んだ歌が百十九首収録されている。そのうち、「咲く、散る」、「折る、取る、かざし、かつら」、あるいは「雪」とセットで詠み出された歌のほうが圧倒的に多い。付録の統計結果によると、百十九首のうち、「折る、取る、かざし、かつら」と結び合わせて吟詠された歌が二十二首、「咲く、散る」と関連付けて詠まれたのが三十七首、「雪」に譬えられ、もしくは「雪」と共に詠じ出された歌が三十二首である。例えば、

（0822）我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも　大伴旅人

（0828）人ごとに折かざしつゝ遊べどもいやめづらしき梅の花かも　丹治比麻呂

などが挙げられる。しかし、漢詩にもこれらとよく似通っている風景が描かれている。

春近く寒さ転じたと雖も、梅舒て雪尚漂ふ。

（「詠雪里梅詩」・陰鏗・『玉台新詠』）

自ら梅花を折て鬢端に挿す。（「立春絶句二首」・朱淑真）

梅の盛りの折節に雪がひらひらと舞い落ちてくる景色、あるいは折り枝を美人の頭に挿すという意趣は、いずれも『万葉集』の世界と同工異曲の妙を得ている。また、『万葉集』巻五に収録されている大伴旅人の作とされる三十二首梅花の歌の序文、「若非翰苑、何以攄情。詩紀落梅之篇。古今夫何異矣。宜賦園梅、聊成短詠（もし翰苑にあらずは、何をもちてか情を抒べむ。詩に落梅の篇を紀す、古今それ何ぞ異ならむ。よろしく園梅を賦して、いささかに短詠を成すべし）」からすると、『万葉集』における梅花の捉え方は漢詩からかなり大きな影響を受けていることが読み取れる。その上、「梅の香」を詠んだ歌は、巻二十に収録されている市原王の歌「梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ」しか看取できない。

このような状況は『新撰万葉集』から少しずつ変わっていく。菅原道真によって編纂されたと言われている『新撰万葉集』の上巻を調べたところ、梅に関する例は左の通り、二組の和歌と漢詩の組み合わせが確認できる。

散ると見てあるべきものを梅の花うたて匂ひの袖にとまれる

春風触処物皆楽、上苑梅花開也落。
淑女偸攀堪作簪、残香匂袖払難却。

花の香を風のたよりにまじへてぞ鶯さそふしるべにはやる

頻遣花香遠近賒、家々処々連中加。

黄鶯出各無媒介、睢可梅風為指車。

「散砥見手」の一首について、山本登朗が論の中で「梅の花の香りが袖に残って消えないことを『うたて』と言う、（中略）その香りを男性の薫香と誤って人が、『とがめる』点にある[2]」と述べ、梅の香を男の残香にも似ているという比喩的表現でとらえている。二番目の例では、「花の香」を風の便りに添え、鶯をいざなう案内として送るというように具現している。更に付け添えられている漢詩にある「梅風」も、「梅の香を帯びる薫風」のことであろうと推測できる。このように、『万葉集』ではあまり詠まれていない「梅の香」は、九世紀末期より多く吟じられ始めたことが見て取れるのである。

更に、『古今集』に至って、一変して梅の香をモチーフとして詠んだ歌が圧倒的に多くなっていく。

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも　読人不知

春の夜梅花をよめる

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる　凡河内躬恒

『古今集』の歌がいうように、梅花の色より、その香りのほうによほど趣があり、高く梅香を褒め称えている。これこそ日本詩歌に一般化した「梅の花」のイメージとよく対応していると言える。また凡河内躬恒の歌では、花の姿が闇に隠されて見えないが、その香りは隠れはしないと、梅の香が主題として詠み上げられている。このように嗅覚の視点から梅花を吟詠する歌は、『古今集』以来非常に数多くなった。

『古今集』以降の勅撰集を集計したところ、「梅に鶯」、「梅に雪」という定番の組み合わせのほか、その花色よりは花香に極めて比重を置くようになった（付録参照）。梅の色を詠む際に香が付き添う例も少なからずある。そして、『新古今和歌集』に至っては梅の香がより一層大事にされつつある。例えば、

大空は梅のにほひにかすみつつくもりもはてぬ春の夜の月　藤原定家

梅が香に昔をとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる　藤原定家

などのように、月夜の梅香がありありと描写され、直ちに読者の前へ漂ってくる感じさえする。その上、「梅が香に昔をとへば」という定家の歌のように、本節冒頭の『伊勢物語』並びに『徒然草』と等しく、「梅の香」に「昔」を偲ばせる力が添え加えられている。要するに、『万葉集』において梅を詠む際に「梅の香」を際立たせて吟詠する意識がまだ存在しておらず、風物

に対して視覚、あるいは直観的なセンシビリティから着目することが一般的である。このような捉え方は『古今集』に至って百八十度変わり、色などから梅を詠んだ例もなくはないが、香を中心に詠じるのが圧倒的に多くなった。『古今集』以来の梅の詠み方は段々定着し、後の詩歌の主調として踏襲されている。

梅花の姿を多角的に描き尽そうとする漢詩と比べ、室町後期の三条西実枝が『初学一葉』の中で、「梅は取りわき匂を賞する物なれば、幾度も其の心を詠ずべし」と言っているように、和歌において、特に九世紀以降の和歌集が表している通り、嗅覚を働かせて吟詠することにかなりの比重を置き、「梅香」に大きな関心が払われている。そのうえ、『新古今』にある定家の歌のように、梅香に昔、あるいは故人を偲ぶ役割も付け加えた。その詠みぶりが俳諧に至っても受け継がれたのである。次に、梅の本意を踏まえながら芭蕉発句を幾つか取り出して検討し、梅の捉え方について考察してみる。

三、「盛なる梅」と「神ひさうの梅」

連歌論書の『梵灯庵袖下集』では、「梅は、匂ひ草・かへはへ草、色香草、この花草、香取草、五種草」と、梅の異名を書き記している。これらの異名から梅花の薫り高さが読み取れる。また『山の井』では、「かほる、匂ふ、ずはえ、難波、北野、太庾嶺付」などを梅の付合語として掲出している。梅の香、梅の名所という順番で言葉が羅列されており、梅の色などの付合語は確認できない。つまり、連歌、俳諧連歌に至っても古代からの伝統を受け継いでいたことが窺える。しかし、俳諧は時代、流派などによってその作風が随分変わってくる。従って、本節では具体例から、貞門や談林、そして初期芭蕉発句における梅について論じる。

貞門の四大撰集の一つである『崑山集』に、

香をさして梅といふ夜や真の闇　　毎延

梅の花最第一のにほひかな　　長頭丸

などの句がある。毎延が句で闇夜に梅の香を鼻にし、歌とよく似通った風景が作り出されているのに対し、長頭丸は明白に香こそ梅花の一番大事なところだと主張している。そして、同じ貞門の俳諧集に次のような句が挙げられる。

遠近へ香をやり梅の嵐かな　　望一　『望一千句』

色よりも香こそあつたら梅の風　　独友　『続山井』

望一の句は古典を踏まえながら、「香をやり」から「やり梅」にかけて詠み上げている。言葉遊びという貞門のよく用いる作

風を表出している。また独友が、前出の『古今集』の歌「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」を下敷きにし、梅の香さえあれば春を十分に楽しめると詠んでいる。このように、梅の香を際立つ伝統的な詠み方が発句にも受け継がれていることが分かるが、いずれの句からも和歌の面影が読み取れ、ユニークさが非常に乏しいのである。言い換えれば、梅の伝統的な本意を突出させるよりは古典を滑稽的に捩ることを基本としている。

寛文二年、藤堂良忠（俳号蝉吟）に召し抱えられた芭蕉は、宗房という俳号を以て蝉吟と共に季吟に従い、俳諧の道を歩み始めた。そして、良忠が亡くなった翌年寛文七年に次のように初めて梅の一句を詠み上げた。

盛なる梅にす手引風もかな　宗房

貞門時代の句であるが、幸田露伴は『芭蕉俳句研究』の中で、この句に対してよく分からない、難解である句だと指摘していながらも、

笛の曲に落梅の曲といふのがある、それを琴の手へもつて来たのでせう。琴の手には本手、替手など云ふのがある。落梅ではなく盛りの梅、笛ではなく琴三弦にして興じ、その花へ吹く風を、うるさく搦んで吹かずにスラリとやさしく、即ち花を落し散らさぬほどの風が吹けといふ意を『素手ひく風』と云つたのかと思ひます。[3]

と解釈を加えている。また『続芭蕉俳句評釈』の中で菱花は、

咲き誇つてゐる梅にそよ〳〵と花が散らぬ様に吹きかゝる風があつたらば好からう、言替へれば、素手引く即ち無意義な風が吹いては呉れまいか、そして其香りを送りくれよと、花の香を望んだ句意であらうと思ふ、かなは哉でなくもがなである。[4]

と解いている。露伴は笛曲を踏まえ、「す手引風」を「花を散らさぬ風」というようにを説明している。また菱花は「風も哉」は「風もがな」で願望を表す言葉であると指摘し、一句を前節で述べた梅の本意、即ち「梅香」を取り入れて解釈したのである。『続無名抄』では「す手引」は「得る所なくして空しく手を引く。空手で帰るの義」と注釈されているが、この意から見れば、右記の両氏のように、「花を散らさぬ」風と理解したほうが最も適切である。

その上、貞門時代のこの句に対して、芭蕉は「す」に梅の「酸」を利かしていると穎原退蔵が述べている。是誰が表した『玉櫛笥』には「やさしきを体として、をかしきを用とす」という貞門の俳諧観をまとめた文句がある。芸術的止揚を考えず、和歌

や連歌にはない俳言を用いて滑稽を具現するのは貞門の特徴と言えるが、『玉櫛笥』がいう「をかしき」とは機知的な言葉の洒落に過ぎない。つまり、古典を弄びながら、生活との関わりによる卑俗な駄洒落という詩的表現を多用するのは貞門の特色である。このようにすると、「盛なる」一句の滑稽味は正に「す」という掛け言葉にあり、貞門の作風をよく表出している一句である。この句からはまだ芭蕉なりの「梅花」に対する捉え方が読み取りにくいのである。

そして、談林俳諧集でも同じく梅の香が多く詠まれている。例えば、

梅が香に立寄る人や兵部卿　　定貫『ゆめみ草』

梅の花後家が軒端の東風ふかば　常矩『俳諧雑巾』

などが挙げられる。『兵部卿物語』を踏まえながらできた定貫の句では、梅の香に惹かれて立寄る人の姿がありありと表出されている。また正村の句に香という文字が使われていないが、梅の花を触れた長袖にその香りが残っていることを連想させる。更に常矩の句でも香という字が見られないが、香が東風によって表出されている。一句は『拾遺集』にある「こち吹かば匂おこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」という菅原道真の歌を踏まえながら、「後家」で「あるじなし」を利かせ、古典をもじったのである。後家の色香を諧謔的に詠み上げるあたりから談林の風調が強く感じられる。

田中善信が論「俳諧における寓言論の発生について」において、「貞徳は季題のもつ伝統的な概念――本意――に即して発想しているのに対し、宗因はそれとは関わりのない場において想を得ている[5]」と、貞徳と宗因が季題に対する態度の違いから、貞門と談林の俳諧観の相異を指摘しているが、貞門の発句を参考にしたところ、ここの「本意」はまだ言葉遊びの段階に留まっている。貞門俳諧とは違い、談林俳諧はより一層自由奔放的になり、軽妙さに富むことがその特色である。例えば、謡曲などの慣用句を下敷きにして句を詠むなり、矢数俳諧、破調の句を多く作るなり、いずれも貞門の俳風や堅苦しい作法から抜け出した談林調の自由さを表出している。また、『俳諧蒙求』に、「是かの大小をみたり、寿夭をたがへ、虚を実にし、実を虚にし、是れなるを非とし、非なるを是とする。荘子が寓言これのみにかぎらず、全く俳諧の俳諧たるなり」という、惟中によって系統化された談林寓言説の深意を解き明かしている文句がある。常識をひっくり返したところから生み出された滑稽味こそ俳諧の本質であるというように、談林俳諧がより庶民的になり、一句一句の発想もより斬新奇抜になっている。

引き続き、延宝年間、宗因一派の作風に憧れ、貞門から談林に目を向けた芭蕉の作品では梅の花はどのように詠まれているのかについて踏み入ってみよう。

我も神のひさうやあふぐ梅の花　桃青

延宝四年に詠まれたこの句は天満宮で作られていたと考えられる。この句に対して、山本健吉は『芭蕉全発句』の中で、「妻妾も御秘蔵というから、梅の花を天神の思いものに見立てたエロティシズムが微かに匂う」[6]と評し、貞門風の語調が強く感じる一句であると主張している。しかし、この当時は談林の盛んな時期であるため、一句にはただの機知的な言葉遊びより何かの趣向が潜んでいるはずである。頴原退蔵は『芭蕉俳句新講』で、この句は道真の漢詩「万事皆夢の如し、時々彼蒼を仰ぐ」を踏まえ、「ひさう」いわゆる「秘蔵」に「彼蒼」をかけていると指摘している。加藤楸邨は『芭蕉講座発句篇』において、一句の「ひさう」は謡曲「鉢木」に出てくる「秘蔵」を言いかけて詠んだと述べている。いずれにしても一句の趣向はこの「ひさう」という言葉にあるに違いない。天神の秘蔵である梅の花は、今日この私も仰ぎ見ることができたといった一句には、梅の深意が言及されていない。天和年間に入っても、その梅の句からまだ梅の香、あるいは古を偲ばせるという梅の深意を突出させる工夫、そして梅に対するオリジナルな見方は見て取れない。

要するに、機知的な言葉遊びを主とする貞門から自由な作風を持つ談林に変えたとしても、その頃の芭蕉発句からは、やはり梅という季題に対する芭蕉オリジナルな取り扱い方、あるいは芭蕉なりの視点が見て取れないのである。言い換えれば、この時の芭蕉の作品と言えば、まだ貞門や談林の枠から抜け出していない。しかし、このようなことは蕉風開眼とされる貞享期に入ると一変する。次節から貞享期以降の芭蕉の梅の句をめぐって、幾つかの具体例を分析しながら芭蕉における梅の捉え方について論じる。

四、「梅白し」と「梅花一枝」

貞享元年、芭蕉は『野ざらし紀行』の旅に出た。蕉風開眼とも言われるこの旅をもとに、芭蕉の作風もかなり変わった。そして、梅を吟詠した句も前の時代の句と比べれば、ユニークさが看取できるようになった。また、「芭蕉の『梅』の句は全部で三十一句あるが、写実的あるいは写生的に梅を詠んだ句は少なく、多くは寓意を伴っている。従って挨拶吟が多い。それほど『梅』の本意の拘束力は強固であったということであろう」[7]

と乾裕幸が言うように、芭蕉は挨拶吟において「梅」を多く用いたことが分かる。貞享・元禄期の蕉門句集を調べたところ、これほど挨拶吟において梅の花を多く詠み込むことはあまり見られない。例えば、

『あら野』巻二にある一連の句を見てみよう。

鷹居て折にもどかし梅の花　　鴎歩
むめの花もの気にいらぬけしき哉　越人
藪見しれもどりに折らん梅の花　　落梧
梅折てあたり見廻す野中かな　　一髪
華もなきむめのずはいぞ頼もしき　冬松
みのむしとしれつる梅のさかり哉　蕉笠

網代民部の息に逢て

梅の木になをやどり木や梅の花　　芭蕉

右の一連の梅の句が表しているように「梅を折る」、「咲き乱れる梅の花」、「花はまだつけていない梅の枝」などが描かれているが、前書きを付けて挨拶吟として明記されているのは芭蕉の句だけである。また、蕉門句集を調べたところ、次のように、

上臈の山荘にまし〳〵けるに候し奉りて

梅が香や山路猟入ル犬のまね　去来『猿蓑』

という「梅が香」を通して詠んだ挨拶吟があるが、五句にも足りず、表現手法も芭蕉と随分異なっている。『本朝文選』において、この句に「ある時は摂家親王の御館に候し」という前書きが付けられている。仄かに漂ってくる梅の香を頼りに山路に分け入る自分は、正に獲物を探している犬の如く、謙遜の気持ちで挨拶の意を表したのである。しかし、右の「梅の木に」の句と比べてみれば、芭蕉における梅の詠みぶりとはかなり違っている。

元禄元年の「梅の木に」一句は芭蕉が伊勢神宮を参拝した時、網代民部雪堂亭に招かれて詠んだ挨拶吟である。網代民部に関して、許六は『歴代滑稽伝』において、「伊勢足代民部弘氏は神職の人なり。談林の時上手の名あり」と紹介している。談林派の俳人として当地に名を馳せた弘氏を咲いている梅に、その息子である雪堂を梅の老木で譬えて挨拶の意を表した。この句に対して、『過去種』では、

『家語』曰、不レ知二其子一視二其父一、不レ知二其人一視二其友一、不レ知二其君一視二其所一レ使一、不レ知二其地一視二其草木一云々、この句意は此語を以て可レ弁也。（中略）此吟子息を誉たる詞の内に、自ら称したる趣意あり。其故は梅に梅の寄生と云、是父子共に其色香艶にて似たるとの義也。

というように注釈している。『孔子家語』の文句を踏まえてい

るかどうかは句自体からは見にくいが、その発想は「不レ知二其子一視二其父一」という文句の趣旨とよく似ている。梅の木に寄生木は恰も親子如く、民部も風雅で徳のある人であるが、その子もまた親譲りで、風流の人であると比喩的に挨拶の意を述べた。この時、網代民部はすでに亡くなり、息子はその名網代民部を襲い、雪堂と号した。芭蕉は、宿り木によって、名を受け継いだだけではなく、その父親の風流心も受け継いだと称賛し、俳諧を好むところはその父親と変わりはないということも述べている。清らかな梅の花は正に父子の風雅な心を表している。このように、漢文故事を踏まえ、梅花を用いて挨拶吟を詠み上げるのは芭蕉における梅の一つの特徴と言えよう。次の句からこのような特徴がより明白に見られる。

竹内一枝軒にて

世に丶ほへ梅花一枝のみそさゞい　芭蕉

「世に丶ほへ」の句は貞享二年、芭蕉が故郷の伊賀に滞在したとき、医師明石玄随を訪れた際に詠んだ一吟である。

良医玄随子ハ三度肘を折て、家を医し、国を医す。其居を名付て一枝軒といふ。是彼桂林の一枝の花にもあらず、微笑一枝の花にも寄らず。南花真人の所謂一巣一枝の楽ミ、偃鼠が腹を扣て、無何有の郷に遊び、愚盲の邪熱をさまし、僻智小見の病を治せん事を願ふらん。

右記の『夏炉一路』にこの句と併記されている一文からすると、当時隠棲生活を送っている名医玄随の「一枝軒」という屋号は、『荘子』にある「鷦鷯は森林に巣へども、一枝に過ぎず」、「偃鼠河に飲むも満腹に過ぎず」などの文句によるものであることが分かる。芭蕉も玄随の貪らなく、無為の仙郷を逍遥する心に関心し、同じく『荘子』を踏まえ、挨拶の意を句によって表した。

『日本古典文学大系』では一句が「知足安分している玄随の生活、鷦鷯に比し、折からの梅花によせて、玄随の高風が、梅が香とともに世に匂うであろう」と讃美の意を述べた挨拶吟だと解釈されている。「一枝」は玄随の屋号を表している一方、「梅」の縁語でもあり、下五の「みそさゞい」を引き出す役割も同時に備えている。芭蕉は森林に住んでも一枝にしか住まない鷦鷯の故事を下敷きにし、自分の分をよく悟り、またその分に安んじながら、心を仙郷に遊ばして安らかに住んでいる玄随の人柄を褒めそやしている。また、上五の「世に丶ほへ」という命令形を用いて、薫香を放つ梅の如く、玄随の高徳もこの世に匂い立たせてほしいという敬意をありありと語り出している。このように、梅の薫香を生かし、漢文などを踏まえながら挨拶の意を表している。また、次の名句からもこのような表現手法が窺

える。

京にのぼりて三井秋風が鳴滝の山家集をとふ。

梅林

梅白し昨日ふや鶴を盗れし　芭蕉

よく知られている「梅白し昨日ふや鶴を盗れし」の句も同様である。梅と隠遁との関係をいえば、嘗て西湖に隠棲していた「梅妻鶴子」と称えられる林和靖のことが思い出される。また、中国元の時代の隠者呉鎮は自ら「梅花道人」と名乗り、いずれも梅の清らかである馥郁な香りに託して、隠棲する高尚心、高潔さを表現しようとしているのである。芭蕉は『野ざらし紀行』の途中に、三井秋風の別居を訪問した時、「梅白し昨日ふや鶴を盗れし」と名句を詠み残した。

三井秋風は三井財閥の創始者、三井高利の甥にあたる。家業を継いだ後に家業に実を入れず、京都室町御池上に鳴滝、「花林園」とも称される別荘を構え、贅沢の限りを尽くした。晩年零落し、江戸で没している。しかし、この秋風は貞門の梅盛に俳諧を学び、また宗因と常矩など談林の俳人とも親交していた。その俳諧に専念し、風雅の世界を逍遙する心は芭蕉に敬われ、『野ざらし紀行』の旅に「花林園」を訪れた際、「梅白し」一句のほかに、「樫の木の花にかまはぬ姿哉」という句も詠み、庭にある一本の樫の木は、咲き乱れぬ花と関わらず、飾らぬ姿で聳え立っているというように賛美の意を述べた。

高柳克弘はこの句について、「梅の白さから導き出されてくる鶴のイメージは、眼前にないにも関わらず、異様なまでの存在感を放っている[8]」と解説しているが、白梅の鶴を導き出し、言い換えれば一句が踏まえている林和靖の故事を誘導する役割しか指摘されていない上、隠逸と深く関わる梅への関心は薄い。また麦水は『芭蕉翁発句解・説叢大全』の中で、「当吟、梅林と前書に見ゆれば、白梅の咲たる主を林和靖によそへたり。さらば鶴の有べきにと虚実にわたりて、昨日や鶴は盗れし物ならんかと、姿を眼前に得給ひしならし」と、芭蕉はここで白梅の鮮やかな色で秋風の別宅の清潔さを褒め称えると同時に、秋風の人格を称揚しているといえよう。そして『芭蕉俳句評釈』において望東は「殊に白梅は高潔なる山家の隠士に対し、又齢目出たき鶴に対して、頗る配合のの妙を得ている[9]。」と述べている。ここから見れば、林和靖の故事は一句の中で非常に重要な役割を果たしていることが窺える。その上で、潔白である梅の花で秋風を賞美している。

要するに、梅と隠逸のかかわりに基づき、隠棲する高士の清高さを称賛するときに、芭蕉は梅花を多く用いた。ここの梅花

は単なる風景写生ではなく、その精神面も強調されている。貞門談林時代の言葉遊びの枠から抜け出し、梅花を通して隠者、高徳である人を称えるのが貞享期の芭蕉における「梅」の特色である。正に乾裕幸がいう芭蕉における梅は多くの場合、深意を伴っていることと一致し、また蕉風の変化にも関連していると考えられる。ところが、漢籍故事などがこれらの句における働きを等閑にしてはならない。季語「梅花」が詠み込まれているが、句意、あるいは挨拶の気持ちはやはりそれらの漢文故事によって表出されている。「世にゝほへ」一句では梅の香は描かれているにもかかわらず、「荘子」にある話は主役を担当している。とすれば、芭蕉は梅の本意をどの程度認識し、あるいは生かしているのであろうか。

五、「北の梅」

前節では、漢籍を踏まえ、梅を挨拶吟に詠み込む芭蕉のオリジナルな詠み方についてみてきたが、それのみならず、梅の本意、いわゆる梅香を巧みに生かすことによって、挨拶の気持ちを表現した句もある。

暖簾の奥ものふかし北の梅　　芭蕉

『菊の塵』に収録されたこの句は元禄元年の吟であり、『笈日記』、『蕉翁句集草稿』、『蕉翁句集』には「園女亭」という前書があり、『泊船集』には「いせにてその女亭」という前書が付けられている。そして、宝永三年に刊行された園女の自作『菊の塵』の序文に、

わが此道に入し初は元禄二年の冬なり。あけの年の如月かの翁こゝの人曾良などひきゐきたらせしに、しか〳〵とつけたりければ、翁よろこびて、いかならむことをもつゞりてよとおほせたるに、花までは時雨て残れ檜笠といひ出ければ、やがて脇の句付てたうへて、さらに、のうれんの奥物ふかし北の梅といふ発句をさへきこえられしぞかし。

という文章がある。これらの前書と園女の自序によって、本句は芭蕉が園女のお宅を訪れた時の、園女への挨拶吟であることが分かる。しかし、園女の自序によれば、この句は元禄三年の作だと見られる。これについて、穎原退蔵は真蹟を踏まえ、「本句は『笈の小文』の道中吟であり、園女の覚え違いであろう」[10]と指摘している。また貞享二年に刊行された『明烏』にすでに編者一有の妻である園女の作が入っていることから、園女が俳道に入ったのは元禄二年ではなく、貞享頃だと推測できる。とすれば、「暖簾の」一句は元禄二年前に詠まれた一句と見られ

たほうが妥当であると考える。

「暖簾の」一句について、江戸時代から多くの俳人、学者によって解釈されている。例えば、一筆坊鴎沙が『過去種』の中で、

徒然の南東に応じて北の梅一入おもしろし。春北に向へるにや、猶幸の余情なり。北の字は北野にもひゞき有、云心はその女が心計りかたくおくらしてゆかしの心也。

と「北」一字は梅の付合語「北野」を髣髴させ、余韻の溢れ、情趣に富む一句であると評価している。また、『芭蕉翁発句集蒙引』にある「北庭の梅を女に比し、そのきよらかにしてしかも浅略ならぬを誉たる挨拶なり。すまゐのもやうまでみるが如し」という一文の如く、作者杜哉は「北庭の梅」は女の比喩だというように主張しているが、その理由について説明していない。ところが、明治期に入って出版された『芭蕉句集講義』において、菱花は、「北の梅といふは、婦人の謙遜の美質を顕はす為に、陰なる北の字を遣つたものであろう」というように、陰陽五行説の「男は陽、女は陰」に基づき、「北」は陰を象徴することから、本句において「女」を暗示していると偶々『芭蕉翁発句集蒙引』の主張の裏付けとなった。しかし、同じ『芭蕉句集講義』の中で望東は、

菱花君は暖簾は比喩で実際あつたものではないと言はれるが、私は園女亭が実際さう云ふ家であつて、梅なども咲いて居た、其現実を捕へて句にしたものであらうと思ふ。北の梅は園女が其当時人の妻となつて居つたので、此の字を遣つたものかも知れぬ。[11]

と梅は実際に目に見えるものであり、如実に園女宅の様子を描写することを通し、園女の人品の清らかさを誉めそやしたと言い返している。その上、「北」一字は「北政所」という平安時代正室を指す言葉と共通し、すでに人妻となった園女のことを表していると述べ立てている。

従来の解釈をまとめてみたところ、大体は「北」の字に重点を置きながら、梅を借りて園女を称賛した挨拶吟であると解き明かしている。しかし、一句の季語である「梅」は一体どのような役割を果たしているのか、また「梅の花」は実際に見えているかどうか、更に「暖簾」と「奥」と「梅」とは一句の中でどのように関連し、作動しているのかは疑問に思いつつある。

一句を考える前に、まず暖簾の役割を考える必要がある。『古事類苑』によれば、暖簾とは「塵ヨケ、日ヨケ等の為め、布、板、蓆等にて造り、商店の軒先にかけ、その上に屋標、即ち第〇大〇越等の如き標しを書きたるものをいひ、軟纏より転音せるものなるべし」[12]と記している。つまり、暖簾は多く商家に使われ

るものであると見られる。園女の夫斯波渭川は眼科を以って常の業としているため、うちには商家用の暖簾があることも考えられるが、一家の奥にある北庭を連通する廊下にかかっている暖簾であれば、商売用のものとは想像しにくい。谷峯蔵氏は「平安貴族がこの豪華で絢爛な几帳を座居の周辺に造型、使用していたということは、庶民の家々で暖簾を利用していたことも当然と、肯定せざるを得ない[13]」と述べている。要するに、目印を入れた暖簾の商家用価値よりは光、人目を遮蔽するのは暖簾の最も一般的で役割である。とすれば、人目を防ぐための暖簾のかかっている通路、そしてその奥に梅が咲いている風景は目にする、あるいは一瞥できることは考え難いのである。そのため、暖簾は芭蕉の句において嗅覚をより目立たせる役割がある。そして、『万葉集』に収録されている額田王の歌「君待つとわが恋をればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」から、簾は風とよく関連していることが見て取れる。「暖簾」は俳言である故、和歌には詠まれないが、俳諧においてはどのように詠まれているのであろうか。

暖簾に東風吹く伊勢の出店哉　蕪村『蕪村句集』

蝶遊ぶまがきの竹に培ひて　蘭洞

風なつかしくのれんかけたり　李蹊

丸ごしで遠くは行じ夏の月　月渓『御忌の鐘』

右記の発句や連句から見れば、語源が禅語の「ノウレン[14]」である暖簾は、漢語として歌には詠まれないが、俳諧において「暖簾」を風、特に「東風」と結び合わせて吟じるケースが多い。従って、芭蕉の句にある暖簾は「目に見えない」、「風を引き出す」役割が同時に備え、嗅覚の働きを強めていると筆者が考える。

そして、北の意味を従来の解釈書に基づきもう一度検討する。島田青峰氏は『芭蕉名句評釈』の中で「北を女の住処とし、北の方といふ尊称もあることから、園女の為に特にこの語を置いた点もありはしないか[15]」と指摘している。平安時代、貴族の邸宅には、正殿の「寝殿」とは別に、北に「北対」という私的な居住棟があり、そこでは主の正室である北方が家政の諸事万端を決裁していた。これによって、「北」の役割として人妻である園女のことを暗示しているかもしれないが、決してこの意味に限らない。

白楽天の「早春即事」にある「北檐梅晩白、東岸柳先青」という一句のように、北の梅といえば、まず咲遅いイメージがある。芭蕉は「北の梅」を用い、園女のお宅であるからこそ、咲遅い北の梅もこの寒い中に匂ってきて、奥ゆかしい限りで、誠に園女その人と同じく清雅なのだという趣旨を述べたのであろ

う。そして、芭蕉の句に対し、園女が「松ちりなして二月の頃」と脇を付けた。芭蕉の讃美に対して、松の葉が散り放題で何の風情もないと謙遜の気持ちを込めて返した。従って、「北」は単なる人妻であることを表しているのではなく、挨拶の気持ちを増やすものとして詠み込まれているのである。

梅について前節では既に論じたが、日本文学における梅を鑑賞する際に、その香を大事に分析しなければならない。そして、芭蕉の句にある梅も例外なく、香りを目立たせながら詠まれているケースが数多くある。右で「暖簾」と「北」の意味や役割について検討したが、「暖簾の奥ものふかし北の梅」一句では、梅は実際に目に見えたものではなく、忽ち暖簾の隙間から吹いてきた風を通し、その香りを携えてきたのである。元禄七年園女亭で句会が行われ、それに際し、芭蕉が「白菊の目に立てゝ見る塵もなし」と詠み上げた。清らかである白菊に託して、園女の風流と清浄さを讃えたのである。「白菊」の句は視覚を中心に詠まれた句と言っても過言ではないが、「暖簾の」句は視覚より、嗅覚の働きが強いと思われる。

園女への句において暗喩的に梅の花、あるいは梅香を借り、挨拶の意を表出したのである。一句は「暖簾のかかっているところであるため、奥の庭に咲き乱れている梅が見えるわけにはいかない。そこで風を暗示する暖簾という言葉で、風に添えて漂ってきた清雅なる梅香を連想させる。鼻にした花の香で北の庭には梅が咲いていることを察知し、奥ゆかしい限りで心が惹きつけられ、薫香を放つ梅は正に園女その人のように床しく、風雅な心を持っている」と解釈したほうが適切であろう。濃厚たる梅の香、いわゆる梅の本意を生かし、挨拶の気持ちを醸し出していると考える。

そのため、芭蕉は「梅」を視覚的に捉えるよりは、常に目に見えない香そのものを詠出している。多くの場合梅花は挨拶の気持ちの担い手として用いられている。中国の故事を踏まえて詠むケースもあるが、日本文学に貫く梅の本意を大事にし、挨拶の意を梅の清雅なる香を通して匂い立たせている句もある。これも芭蕉における梅花の句の特徴だと言えよう。

六、追悼の「梅花」と懐古の「梅香」

元禄十年に出版された『濱のまさご』という有賀長伯の歌学書にある「梅は色よりも匂ひを賞翫するよし也」という文がいっているように、「梅」が放つ薫香に関心を寄せることこそ詩歌における「梅の本意」であるが、第二節で述べたように、この

香には古、故人を思い浮かばせる力もある。このような力は芭蕉発句においてどのように表現され、あるいは生かされたのかについて本節で検討する。

蒟蒻のさしみもすこし梅の花　　芭蕉

『蕉翁句集』では元禄六年のこの句に対して「去来へ遣ス」という前書が付されている上、「此句ハ無人のこと抔云ついでと云り」という注記も付けられている。前書が言っているように、この句は故人への追善句であり、亡くなった去来の妹、千子を偲ぶ念が一句からしみじみと感じられる。八亀師勝は挨拶吟について、「挨拶・謝意・祝賀・歓迎の心を詠んだ句。広義の挨拶の句（追悼句、留別吟なども含む）とはやや違う[16]」と述べている通り、ここの追悼吟は挨拶吟のジャンルに数えられない。

頴原退蔵氏はこの句を「梅は咲いたけれども、春もまだ肌寒い。その梅を手折り蒟蒻を供へて、ひそやかに故人の追福を修するさまを、かうして去来に言ひ送つたのだ[17]」と解釈している。また『芭蕉全句』は一句の意味を「亡き人の忌日とて、蒟蒻の刺し身も少し添え斎膳を供えた。庭前には、余寒の中に梅の花が咲き出て故人を偲ぶ心にふさわしい」と注し、咲いている梅は故人を偲ぶのに相応しいと梅花に賦与された懐古の意を示唆している。それに対して、『新編日本古典文学全集』では、本句が「仏前にこんにゃくの刺身を少しと梅の花を供えやってくれよ、と去来に頼んでいる句と取ったほうがいいかもしれない」というように解読されている。それ以降の解釈書ではほぼ『新編日本古典文学全集』と同じ解釈がなされているが、梅の本意まで言及していない。

一句において、「蒟蒻のさしみ」という俗語、いわゆる俳言と「梅の花」という歌語との組み合わせに俳諧性が感じ取れる。『蕉翁句集』の注によると、「蒟蒻のさしみ」とは故人の仏前への供え物であるが、そこに梅の花を付け加えることによって、俗っぽい「蒟蒻のさしみ」に清雅さ、慎ましさも同時に加えられたのである。とすれば、「梅の花」は本句において故人を偲ばせる役割のほか、一句の俳諧性を産み出す働きも同時に備えている。

頴原氏は梅を手折って「蒟蒻のさしみ」と一緒に亡き人へ供えると指摘しているが、梅そのものよりは梅の香もその奥に潜んでいると筆者が考えている。まず梅はどに咲いているのであろうか。元禄六年の春、芭蕉は江戸に滞在し、三月二十九日から四月三、四日まで許六亭に逗留した。また『蕉翁句集』などにある前書「去来へ遣ス」からすると、この句は去来へ送った

手紙に書いてあったことが判断できる。とすれば、去来に頼み、「蒟蒻のさしみ」と「梅の花」を仏前に供えってくれという『新編日本古典文学全集』の解釈はいかにも不自然であり、梅の花を折るよりは、古を偲ばせる力のある香を借りて故人を供養するという意で取ったほうが適当だと考える。一句は正に今日は故人の忌日とて、今出来上がりの「蒟蒻のさしみ」を少し仏前に供えて、故人の事を思い出しているという芭蕉自身の様子を詠み出している。そして、咲き乱れる梅の花の清らかな香を嗅いで、故人を偲ぶ気持ちがより一層膨らんできた。蒟蒻を大好物である芭蕉の事をよく知っている去来は、きっと温かい気持ちでこの句を詠み、恩師の心を受けたのであろう。

よって、梅の香と「蒟蒻のさしみ」の香が溶け込んでいる様が一句に詠まれ、香の意が一句の中に潜んでいると考える。庭に咲く梅の香でもともと精進料理である「蒟蒻のさしみ」の上に更なる清らかな香を立ちのぼらせ、これを故人に供えようという芭蕉の思い、また亡くなった友人への追悼の念は梅の香によってより明白に窺えると考えられる。従って、この句も梅の本意を巧みに生かした上で、「蒟蒻」という俗語を配することを通して新しみを醸し出した一句である。『俳諧問答』にある、

惣別おもき軽きといふ事、趣向又は詞つゞき容易なるをかるきとおぼえ侍りて、上をぬぐひたるやうなる句、此ごろいくばくか侍る。それはうつけたるといふものにて、かるきといふものにはなし。（中略）かるきといふハ、発句も附句も求ずしてたゞに見るがごときを言ふ也。詞の容易なる趣向の軽き事をいふにあらず、腸の厚き所より出て一句の上に自然とあり。

という一文からみれば、芭蕉が晩年追及している「軽み」とは作意によらず、素直に物事を詠み上げることであり、貞門談林の機知なる言葉遊びとは違い、「新しみ」を恣意的に作り出すことではなく、自然と感じたものと目にしたものを吟ずることである。つまり、「蒟蒻の」一句は目にした風物、嗅覚の刺激、俳言と雅語をうまく調和し、自然的に気持ちを言い出しているのである。この「軽み」という芸術境界を追求することによって、芭蕉が「梅」に対する取り扱い方もより成熟に、「古人や古代を偲ばせる」という梅の本意を巧みに活用するようになってきた。

このように、俳聖と呼ばれた芭蕉も、和歌以来の流れを汲み、梅香に含蓄されている趣旨を生かして幾つかの句を吟詠していたのである。要するに、芭蕉における梅の句を検討する場合、薫香あるいは嗅覚を活用して考察せねばならない。元禄期は蕉

風俳諧がより高次な世界へと昇華する一番重要な時期である。『奥の細道』の旅をはじめ、「不易流行」、「かるみ」などの理念が打ち出され、芭蕉俳諧は今までとは違い、より素直に物事を取り扱うようになった。『去来抄』「修行教」の部に、

不易を知らざれば基立がたく、流行を辨へざれば風あらたならず。不易は古によろしく、後に叶ふ句なれば、千歳不易といふ。流行は一時一時の變にして、昨日の風今日よろしからず、今日の風明日に用ひがたきゆへ、一時流行とは云はやる事をいふなり。

という一文があるが、普遍的な「梅の本意」を用い、そこに時代によって変化してきた新たみを書き加え、心情を陳べることは正にこの「不易流行」の論とよく適していると言えよう。また、このようなことは元禄に詠まれた次の一句からも見られる。

梅が香に昔の一字あはれなり　芭蕉

『笈日記』「文通」の部にある「何某新八去年の春みまかりけるを、ち、梅丸子もとへ申つかはし侍る」という一文によれば、この句は元禄七年、美濃大垣の梅丸の息子新八の一周忌に際して、梅丸に宛てた追善句であることが分かる。また『笈日記』では、この句の後ろに「一歳の夢のごとくにして、猶俤立さらぬ歎のほど、おもひやりける斗に候。二月十三日、梅丸老人」という内容が綴られている。この一文から悲しみに駆られる芭蕉の気持ちが強く感じられる。東海呑吐は『芭蕉句解』において、

当吟は或人追悼の句也。句意は梅が香を詠ぜし事の誠に昨日の様なれども、早其人はなく成て、昔と云一字のみ残れり。然ばむかしの一字哀也と心を添て聞時は、其跡も人に語りがたし。

と一句を解釈している。また、『芭蕉講座発句篇』は「昔の一字」は業平の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」[18]を踏まえていると指摘している。「昔」の一字の由来に対する説が幾つかもあるが、呑吐がいった「昔の一字」は悲しみを表出していることは言うまでもない。

芭蕉が亡くなる元禄七年に詠まれたこの句は梅が香に故人を偲ばせるという本意を生かしつつ、品高い梅の香りで梅丸の子を偲ぶ追善句の品格を高めた。咲く梅の香りに対して、「昔」の一字は哀れに感じる。また梅は変わらずに香り高く咲いたが、その梅のごとき人がすでに散ってしまった。「昔の一字」は無論一句の中で詠嘆の意を強めたが、梅の香も一句においてかなりの働きを果たしている。梅の本意、つまり「古を偲ばせる」香りをうまく生かして追悼の念を詠み上げている。

芭蕉の梅の句は全部で三十一句あるが、明らかに梅の香を生

かして吟詠した句は半分以上もあり、芭蕉の梅の句において最も多いのである。要するに、芭蕉は梅の馥郁たる香を通し、古典美へ立ち返りながら、現世界における自分自身の心境をありありと言い出している。

このように、芭蕉の梅の句は「梅の本意」を最大限に生かし、古典美を髣髴させるのことによって、現実の世界と自分の内心をうまく調和させ、芭蕉晩年に重んじる「軽み」もこれら梅の句から読み取ることができる。更に言えば、旅を栖とし、新風を開創した芭蕉は常に伝統を単なる受け継ぐのではなく、発展という延長線の上に立ちながら伝統をより豊かに粉飾するのである。

七、終わりに

「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」という『古今集』のように、日本文学において、梅は香を賞翫するものである。和歌や漢詩を受け継ぎながら、独自の文化を創り出そうとする俳諧にも、梅の香にかなりの比重を置くことが数多くの例から看取できる。

芭蕉には梅の発句が三十一句あるが、年代によって句作りの特徴も変わってくる。寛文から元和の時期の句からは、まだ貞門談林の余臭が感じられ、言葉遊びや洒落の段階に立ち止まっている。貞享期に入ってから、漢籍などを踏まえ、梅の香を巧みに吟詠し、梅を挨拶吟の中に詠み込み始めた。また元禄期に入った芭蕉はより一層梅の本意に心がけ、その伝統的な取り扱い方を生かし、古典美を髣髴させつつ、実世界における自分の内心を如実に表出するようになった。その上、「軽み」、「不易流行」などへの追及に伴い、一句一句に俳言を取り入れ、オリジナルな捉え方がより明らかに看取できるようになった。

千年不変の香り、古を偲ばせる香気を放つ花々はほかにも花橘、柚の花などが挙げられる。日中詩歌ともに愛でられているが、その詠み方がそれぞれ違うように見られる。人間の五感を巧みに生かす俳諧は極めてこの香を目立たせることによって奥ゆかしい世界を作り出している。そのため、この香の本意、またその中に含意されいる時間性と空間性を究明することは非常に大切である。このような考察は、芭蕉俳諧ではなく、日本文学あるいは美学に貫く根本的なもの、独特性などを探求することにも深く関わっている。

〔注〕

（1）「林逋の詩と梅の歌――室町時代の詠梅歌の変化と宋詩」．渡瀬淳子．『中世文学』58号．二〇一三．

（2）「うたて匂ひの袖にとまれる―『新撰万葉集』と『古今和歌集』」．山本登朗．『短歌と国文学110号』．

（3）『芭蕉俳句研究』．幸田露伴．岩波書店．大正十一年．

（4）『続芭蕉俳句評釈』．寒川鼠骨．大学館．明治四十六年．

（5）「俳諧における寓言論の発生について」．田中善信．『初期俳諧の研究』に収録．新典社．一九八九．

（6）『芭蕉全発句』．山本健吉．講談社．二〇一二．

（7）『芭蕉歳時記』．乾裕幸．富士見書房．一九九一．

（8）『芭蕉の一句』．髙柳克弘．ふらんす堂．二〇〇八．

（9）『芭蕉俳句評釈』．内藤鳴雪．大学館．明治三十七年

（10）『芭蕉の門人たち』．中里富美雄．渓声出版．一九八七．

（11）『芭蕉句集講義』春之巻．角田竹冷．博文館．大正四年．

（12）『古事類苑』．神宮司庁編．古事類苑刊行会．一九〇八～一九三〇．

（13）『暖簾考』．谷峯蔵．日本書籍．一九七九．第二十三頁．

（14）『講座日本風俗史』別巻八．遠藤武．雄山閣．一九六〇．原文：「暖簾の語源は禅語のノウレンよりでたもので、僧堂内で風気を防ぐ意味からさげたものであるが、わが国では古来より日よけ的意味ををもった布帛を幌、つまりトバリといゝ、蔀をあげた際の日除け的なものであり、時には障子的な役割をさえはたしていたようである」。

（15）『芭蕉名句評釈』．島田青峰．非凡閣．一九三四．

（16）「芭蕉の挨拶の句」八亀師勝．『アカデミア63』．一九六八．

（17）『芭蕉俳句新講』．頴原退蔵．岩波書店．一九五一．

（18）『芭蕉講座発句篇(上)』．加藤楸邨．三省堂．昭和十八年．

参考文献

① 『芭蕉の恋句』．東雅明．岩波新書．一九七九．

② 「芭蕉の挨拶の句」八亀師勝．『アカデミア63』．一九六八．

③ 『芭蕉―その鑑賞と批評』．山本健吉．飯塚書店．二〇〇六．

④ 「芭蕉と梅の花（上）」佐藤圓．『解釈10』．解釈学会．一九七四．／「芭蕉と梅の花（下）」佐藤圓．『解釈3』．解釈学会．一九七五．

⑤ 『花の変奏――花と日本文化』．中西進．ぺりかん社．一九九七．

⑥「梅が香」乾裕幸.『俳句研究56（2）』. 俳句研究社. 一九八九.
⑦『発想と表現』.「季の詞――この秩序の世界」山本健吉. 角川書店. 昭和四十五年.

付録・和歌における「梅花」

『万葉集』	百十九首	番号	例歌	作者
梅に鶯	十四首	827	春されば木末隠りて鶯ぞ鳴きて去ぬなる梅が下枝に	小典山氏若麻呂
梅に春雨	四首	792	春雨を待つとにしあらし我がやどの若木の梅もいまだふゝめり	藤原久須麻呂
折る／かざし	二十二首	821	青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし	笠沙弥
梅に雪	二十二首	844	妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも	小野国堅
咲く／盛り／散る	三十七首	851	我が宿に盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも	大伴旅人
梅が香	一首	4500	梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ	市原王
その他	十九首	453	我妹子が植ゑし梅の木見るごとに心咽せつゝ涙し流る	大伴旅人

『古今集』春	十七首	番号	例歌	作者
梅に鶯	三首	⑤番	梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ	読人しらず
		㉜番	折りつれば袖こそにほへ梅花ありとやこゝにうぐいすのなく	読人しらず
梅色	二首	㊲番	よそにのみあはれとぞみし梅花あかね色かは折りてなりけり	素性法師
		㊳番	きみならで誰にかみせん梅花色をもかをもしる人ぞしる	紀友則
梅が香	十一首	㉝番	色よりもかこそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも	読人しらず
		㊵番	月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける	凡河内躬恒
		㊶番	春の夜のやみはあやなし梅花色こそみえねかやはかくる、	凡河内躬恒
		㊽番	ちりぬともかをだにのこせ梅花こひしき時の思ひいでにせん	読人しらず
その他	二首	㉞番	やどちかく梅の花うへじあぢきなく松人のかにあやまたれけり	読人しらず
『後撰集』春	十八首	番号	例歌	作者
梅に春雨	二首	㉜番	春雨のふらばの山にまじりなん梅の花がさありといふなり	読人しらず
梅折る	四首	⑯番	なほざりに折りつるものを梅花こきかに我や衣そめてむ	閑院左大臣
梅色	三首	㊹番	紅に色をばかへて梅花かぞことごとにこほざりける	凡河内躬恒
梅が香	三首	㉛番	梅花香をふきかくる春風に心をそめば人やとがめむ	読人しらず
その他	六首	㉖番	わがやどの梅のはつ花ひるは雪よるは月とも見えまがふかな	読人しらず

『拾遺集』	三十	番号	例歌	作者
梅に雪	六首	⑧番	春立ちて猶ふる雪は梅の花さくほどもなくちるかとぞ見る	凡河内躬恒
折る／かざる	五首	1005	あかざりし君がにほひのこひしさに梅の花をぞけさは折りつる	後醍醐院
梅色	二首	㉛番	匂をば風にそふとも梅の花色さへあやなあだにちらすな	能宣
梅が香	四首	1006	こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな	道真
その他	十三首	㉙番	あさまだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風うしろめたさに	元良親王
『後拾遺集』春	十六首	番号	例歌	作者
梅色	一首	54	梅の花香はことごとににほはねど薄く濃くこそ色は咲きけれ	清原元輔
梅が香	十三首	52	春の夜の闇にしあればにほひくる梅よりほかの花なかりけり	藤原公任
その他	二首	64	たづねくる人にも見せむ梅の花散るとも見つになかれさらなむ	読人しらず
『金葉和歌集』春	十首	番号	例歌	作者
梅に鶯	五首	⑮番	けふよりや梅の立枝に鶯のこゑさとなるるはじめなるらむ	春宮大夫公実
梅が香	四首	㉕番	むめがえに風やふくらん春の夜はをらぬ袖さへにほひぬるかな	前太宰大弐長房
その他	一首	㉖番	けふここに見に来ざりせば梅の花ひとりや春の風にちらまし	大納言経信
『詞花和歌集』	二首	番号	例歌	作者
梅が香	二首	⑨番	吹き来れば香をなつかしみ梅の花散らさぬほどの春風もがな	源時綱
		⑩番	梅の花にほひを道のしるべにて主も知らぬ宿に来にけり	藤原定家

『千載和歌集』	十六	番号	例歌	作者
梅に雪	二首	⑮番	咲き染むる梅の立ち枝に降る雪の重なる数を十重とこそ思へ	藤原俊忠
折る／かざし	一首	㉑番	むめの花をりてかざしにさしつれば衣におつる雪かとぞ見る	徳大寺公能
梅が香	九首	㉔番	春の夜はのきばのむめをもる月の光もかをる心ちこそすれ	藤原俊成
その他	四首	⑲番	今よりはむめ咲くやとは心せん待たぬに来ます人も有りけり	大納言師頼
『新古今集』春	十六首	番号	例歌	作者
梅に雪	一首	㉘番	梅が枝に物うき程に散る雪を花ともいはじ春の名立に	源重之
梅に鶯	一首	㉚番	梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の羽しろたへに淡雪ぞふる	山邊赤人
折る	一首	50	「一月雪落衣」といふ事をよみ侍りける 梅ちらす風もこえてや吹きつらんかをれる雪の袖にみだるゝ	康資王母
梅が香	八首	㊵番	大空は梅のにほひに霞みつゝくもりもはてぬ春の夜の月	藤原定家
		㊹番	梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ	藤原定家
		㊺番	梅が香に昔をとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる	藤原定家
その他	五首	52	詠めつる今日は昔になりぬ共軒ばの梅は我を忘るな	式子内親王

（こ　ぶんかい／本学大学院生）